

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

気象予報士生みの親／官界でも本領

多摩高校の卒業生は、官僚や公務員になった人も多い。

元中国運輸局長で、気象庁時代は「気象予報士の生みの親」を自負する亀甲邦敏（71、1961年卒）は新聞部と合唱部を掛け持ちし、生徒会長も務めた。「大師強歩や体育祭など行事が多かった。長野の入笠山な



多摩高初の東大合格を果たした亀甲



多摩高校 7

どでキャンプもした」。退官後は北総鉄道や交通新聞社などの社長に。「高校時代の経験が社会に出て役立った」と言う。

元北海道警本部長で、大手IT企業特別顧問の殿川一郎（58、74年卒）は「暗室が使えるから」と写真部に。SLなど鉄道写真に熱中し、卒業アルバム撮影も担当した。「先生たちは、勉強しろともスポーツしろとも言わない。何かの方向性を付けようとはしない、自由な校風だった」と振り返る。

「何かをする時、夜遅くまで、時には休日も使った」とことん議論した」と話すのは、外務省審議官で諸外国との経済問題の交渉官を務める五嶋賢二（56、77年卒）。多摩高時代はワンタールフォーゲル部員で生徒会長だった。2年の修学旅行に得意の



「2、3日で終わらせるつもりで交渉に、2週間かかったこともある」と話す五嶋

ギターを持参。「クラスのみんなど新幹線の中で、かぐや姫、風、アリス、チューリップ、吉田拓郎などを何時間も歌い続けた」と懐かしむ。

陸上自衛隊九州補給処（佐賀県吉野ヶ里町）副処長の石崎敦士（53、80年卒）は4年前、パキスタン洪水の国際緊急航空援助隊長として3カ月間、現地で活動した。高校時代はバスケット部。「いつも法政二高に負け、悔しくて練習に力が入った」。30歳のころ、希望して広告会社で1年間研修した。「自由なことが言える多摩高にいなかったら、そんな発想はできなかったかもしれない」と言う。

10月まで5カ月間にわたり、



オペラやサッカーが好きで、20回以上も海外に一人旅した安部

多摩高の剣道部で身についた「武士道」の考え方は、今も仕事や生活で役立っているという。「3年の体育祭で3人で演武をしたことや、騎馬戦で優勝したことが忘れられない」

多摩高同窓会長2期目となる安部卓見（65、67年卒）は県内広域水道企業団理事を務めた。若い頃には旧自治省と旧厚生省に出向。妻の幸子（65、67年卒、旧姓・井田）は同級生だ。当時、先生たちから教わった「安易な道は選ぶな。火中の栗を拾うものだ」という言葉は、「その後の人生で大いに実践し、役に立った」という。

多摩高で古い校舎4棟を3棟にする建て替え工事が進んでおり、グラウンドに新築された3階建ての東棟はこの4月から使われている。今年度は2棟を解体し、2015、16年度で跡地に3階建ての中央棟と西棟を造る。